再発見　7 人制ラグビー

ラグビーの多人数闘争の時代を経てイコールコンディション（同人平等）の原則の元に 1 チーム 15 人という究極の形態と言われるものを作り上げました。7 人制がオリンピック種目に決まったことに唐突さを感じている人がいますが、それは最近のグローバルな情報不足の結果であって唐突なものではありません。

running handling game ラグビーを 1 本の棒に例えると、その両端にあるのが 15 人制と 7 人制です。15 人制が普及発展するのと並行するように少人数ゲームへの関心が増大していきました。現在 15 人制と 7 人制は一本の天秤棒の両端に位置するものとして、それぞれのアイデンティティを活かしたら車の両輪のようにラグビー普及発展と必要条件を備えたものと考えられ、どちらに傾くこともなく進めることが肝要とされています。

running handling game ラグビーの handling には手渡しから色々な長いパスがあり passing game です。グラウンド一杯に走り回り、パスし続けて思いっきり楽しもうというものです。passing game といえばフランスの passing rugby 俗称シャンパンラグビーが思い出されます。後から後からサポートが湧くように現れてボールを追いかけポンポンとはじけるようにパスがなされるのはまさに「シャンパン」の言葉通りでした。更に今日ではパントキックから連続攻撃を「足によるパス」という言い方もされています。フランスラグビーの基本原則は「防御ライン（壁）に対しては扉（入口）を見出して突破する」ことで防御壁を破ることは労が多いだけであるということです。そしてバックラインの一番外側に大きな扉（開口部）があることを忘れてはいけないということです。そのために走るコースは斜め一辺倒ではなく出来るだけ縦（ゴールラインに直角）にすることで、内側の味方にリターンすることも役立ちます。ラインの外側の開口スペースを大きくすることにもなり、ゴールラインに直角に攻めるすなわち最短距離を攻めるというセオリーにも合致するのです。壁にぶち当り力ずくで突破するよりも flair を活かし選択肢を多くして戦う方が楽しいということを理解しなければなりません。

1960 年代に入ってラグビーは power と flair を合言葉に発展するのですが、どちらかと言えば power に重点が置かれ「接点の強さ」が強調される傾向があり、接点で強いことが第一条件となり知能や技能を内容とする flair は軽視されました。身体をぶつけ合いボールを取り合う時間が多くなりました。一方、The Guide for Coaches などによってラグビーを simple & easier にすることによって、より楽しいものにする提言もなされました。

そして 1980 年代に Don Rutherford によってミニラグビー（9 人制）が考案され出版されました。フォワード 4 人、バックス 5 人の 9 人制は 15 人制ラグビーのレベルを上げるのには多大な貢献をしたと言われていますが、一方少人数ラグビーへの道を開いたことも事実です。9 人制は合理的です素晴らしいものでしたが、中間的なものであったことは否定できません。ミニラグビーが紹介されるに際して指導にあたっては「教育とは火をつけるようなもので、水差しで水を注ぐようなものではない」という有名な言葉を引用して flair の重要さを強調されたことが印象的でした。

日常の練習では準備段階でタッチフットをするのが普通のことですが、タックルを無くしてタッチで一旦ゲームが切れて何回かのタッチで攻撃側が交代するという方法簡単で流動的でありチームの人数も 3～4 人の小グループ、5～6 人の中グループ、8～9 人の大グループと自由自在に組むことが出来るものですから安易に実施でき、しかもパスの上達と走力の向上に役立ちます。このようにタッチフットが 7 人制ラグビーに結び付いていったことも一つの過程です。ゲーム時間が短いので短時間に多くのゲームを組むことが出来るのも利点の一つです。

ラグビーの原則は人数に関わりなく「always on the ball」です。またルールの原理は equal condition, open play, safety を志向していることに変わりありません。

ラグビー競技の車の両輪に例えられる 15 人制と 7 人制がどちらかに傾くことなくバランスがとれて普及発展していくことを願い信じます。

2010. 08. 08
西川　義行